

聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」

「直ぐな心で（ヨシエル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う

詩篇119：7、エペソ人6：5「真心から」、マタイ13：44-46

しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

- ②ダイナミックな多角的、立体的構造：背後に神意〔偶然はない〕
全聖書の構成の焦点は、人類の救い主イエス・キリスト
- ③古代ヘブル（イスラエル）史を通して記された正確な人類史：
過去（史実）を学び、現在を見分け、未来を見通す洞察力習得のテキスト
- ④聖書自体が成就を証しする真の神の預言：聖書が聖書を解釈
神の約束の確かさ、成就の確かさ（ご自身の言葉に真実な神）
- ⑥究極的に立証される神のすべての言葉
キリストご自身が神のご計画の「しかり」、アーメン

使徒パウロの宣教

その27

—復習—

ヨシエル40回

☆パウロの第二次宣教旅行（使徒の働き17：1-18：22）の学び

- ☆パウロー行、ピリピからテサロニケへ、三週間滞在後、ベレヤへ、
さらに、パウロだけアテネ、コリントへ
- ☆コリントで、ローマから避難していたユダヤ人夫婦アクラとプリスキラに会い、
一緒に住み、パウロも天幕作りで生計を立て、コリントに約二年間滞在
- ☆パウロ、コリント滞在中に『テサロニケ人への手紙』を書く

ヨシエル45回

☆パウロの第三次宣教旅行（使徒の働き18：23-19：40）の学び

- ☆パウロ、ピシデヤのアンテオケからエペソに行き、
エペソのシナゴグで三ヶ月間、「ツラノの講堂」で二年間、「神の国」について語る
- ☆アクラとプリスキラ夫妻、パウロがエペソに来る前、アレキサンドリヤ出身のアポロに
「神の道」を解き明かし、コリント地方（アカヤ）に送り出す

ヨシエル46回以降

☆『コリント人への手紙第一』、一パウロがエペソに滞在中、執筆—と
『コリント人への手紙第二』の学び

使徒の働き19：1-22

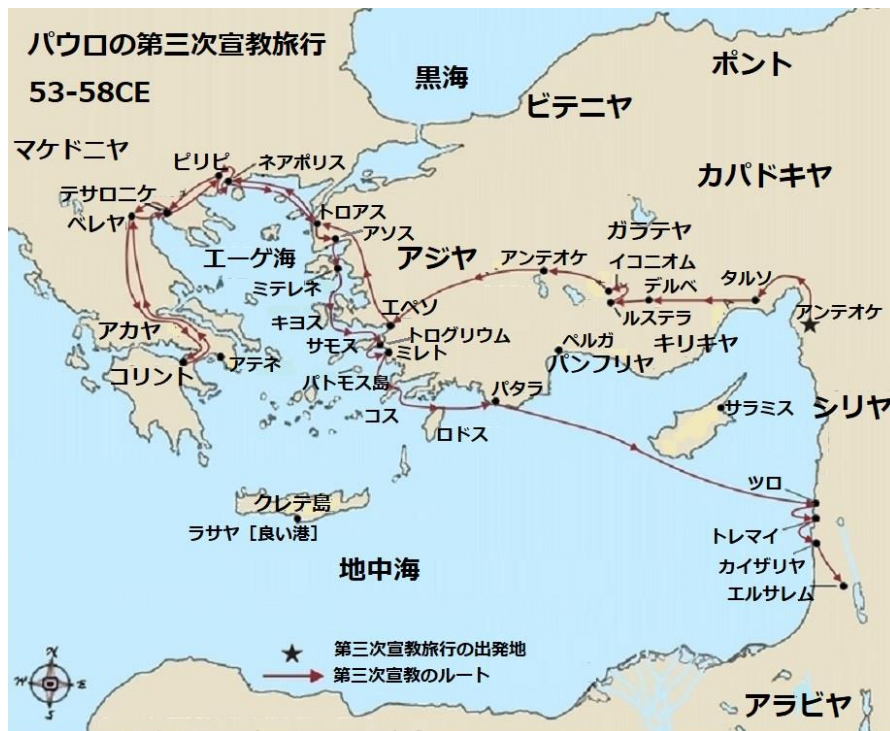
☆エペソでの宣教

- ☆パウロの信仰生活において最も充実した時期
- ☆手ぬぐい、前掛けの奇蹟
- ☆魔術師も回心、御言葉の力、「この道」の拡大
- ☆パウロ、御霊に示され、マケドニヤ、アカヤ経由でエルサレムに向かうことを決意、
テモテとエラストをまず、マケドニヤに送る

使徒の働き19：23-40

☆女神アルテミスの信奉者で銀細工人デメテリオにより騒動勃発、
パウロー行、騒動に巻き込まれるも、町の書記官の機転で混乱収拾

聖書



パウロの第三次宣教旅行 ―帰途の旅―

→『使徒の働き』20：1-3

：1「騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ…」：

パウロ、マケドニアからギリシャへ

☆パウロ、トロアスで、テトスに会うことを期待

☆コリントに送った『厳しい手紙』の影響が気になっていた

☆パウロ、マケドニアに向かう

☆ピリピでテトスからよい便りを知らされ、四通目の書簡『コリント人への手紙第二』を^{かくひつ}欄筆

☆手紙を持たせ、テトスを再びコリントに特派

：2「そして、その地方を通り、多くのことばをもって弟子たちを励まし、ギリシアに来て」：

＊おそらく、マケドニアからアルバニアやイリリクム（旧ユーゴスラビア）も訪問

＊パウロ、三度目のコリント訪問

『ローマ人への手紙』

ローマの教会と『ローマ人への手紙』

☆パウロ、すでにローマにあった幾つかの教会の「聖徒たち」に宛ててこの書簡を送った

☆おそらく、キリスト昇天後の「ペンテコステの日」の回心者が

キリストを信じる者としてローマに帰り、信仰を伝え、家の教会が広がっていた

☆この書簡をローマへ運んだ人はフィベ

→16：1-2

☆パウロ、この書簡をコリントとその東の港ケンクレヤから書いた

☆『ローマ人への手紙』は、神が罪人に無償で提供してくださった

「贖い」に関するご計画の最も完全で、洞察に富んだ声明

☆パウロ、ヘブル語（旧約）聖書の十四書から七十近くに及ぶ聖句引用で、

福音の根底にある、この「神の贖いのご計画」が時代を経てずっと続いていることを訴えた

聖書

パウロの願いと神意

☆西暦57年頃、執筆

☆思いはローマにあり、祈りの都度、主の御旨を求めている

☆すべての道は当時の世界の中心地、ローマに通じていた

☆このパウロの宣教の願い、予期しない形で実現 → 囚人としてローマ入り

☆キリスト信仰の原点を教え諭したこの『ローマ人への手紙』が生み出されたことはまさに神意

☆「神の贖いの歴史」の解き明かし

『ローマ人への手紙』 目次

I 1-8章 福音に顕された神の義

1-3章 罪、罪人

4-5章 神の赦しと救い

6-8章 聖め/聖化への過程

II 9-11章 摂理に見られる神の義

イスラエルの過去、現在、未来

III 12-16章 信徒の歩みに反映される神の義

神と御国の家族

1章

①1-7節 あいさつ

②8-17節 この手紙を書く理由

③18-32節 福音の必要

：1「…使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ」（下線付加）：

＊ ‘δοῦλος（ドゥーロス）’

＊パウロ、自発的に契約を結んで「奴隷」となった旧約時代の「奴僕」の称号を、
キリストに対する自分の関係に適用

「選り分けられた」：

＊神の福音のために

＊パリサイ人のようにこの世の諸事からの孤立ではなく、神への献身、関与への「分離」

「使徒」：

＊権威を委任され、送られた者

福音とは

☆「神の人、イエス・キリストが、私たちの罪のため死に、埋葬され、三日目に死より甦り…」

→コリント人第一15：3-4

☆放蕩息子の話…

＊戻ってきた息子に対する父の喜びは「息子が前より良くなった」ではなく、

「死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、
楽しんで喜ぶのは、当然ではないか」であった

→ルカ15：32

☆同じように、イエス・キリストは、死んだ人に「いのち」を与えるために来られた！

「聖書において前から約束されたもの」

☆福音

☆創世記で、贖いの最初の約束

☆メシヤに関する詳細な預言

聖書

全人類の最初の父祖十人の名に託された預言 創世記5：3-29

アダム→セツ→エノシュ→ケナン→マハラエル→エレデ→エノク→メトシェラ→レメク→ノア

「人は定められた。死すべき、悲しみに。」

しかし、祝福の神は、降りて来られ、教えてくださる。

ご自身の死がもたらすことを。絶望的な（者）に、休息を」

⇒このメシヤ預言は人為的な細工ではなく、神が織り込まれた「人類救済の預言」

：3「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ」（下線付加）：

＊キリストの身分証明はギリシャ語動詞の分詞の直訳で、「～にされた」と表現

＊この声明、キリストの神性が受肉に先立つ基であることを断言

甦りに顕されたキリストの神性

☆この世に人として顕れる前すでに存在しておられた方が、ダビデの血筋/系図に入れられた

☆キリストにおいてメシヤ預言が成就、甦りはキリストがまさに神の子であることの宣言

：5「…御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすためです」（下線付加）：

＊パウロがキリストから直接召名を受けたミニストリーの対象は全諸国の個々人

：7「ローマにいるすべての、神に愛されている人々、召された聖徒たちへ」：

＊この書簡でパウロ、聖徒たちに教示

パウロの挨拶

☆パウロの書簡の中で、救われていない人たちは「神に愛されている人々」とは呼ばれていない

：11「私が…切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分け…」（下線付加）：

1. 自分の御霊の賜物を行使したい

2. 祝福を分かちたい、の両意

霊的に実り多い訪問

☆相互にとって霊的に益

1. ローマの信徒たちを力づける

2. 彼らのうちに、何らかの御霊の実、収穫を見る

3. 彼らによって、自分が力づけられる

：15「彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示し…」：

＊異邦人に対し、借りがあるというパウロの認識、責任感が

パウロを異邦人世界宣教に駆り立てた

＊当時、全世界を揺るがし、すべての中心であったローマへ、

パウロ、ただ福音のために行きたかった

この書簡のテーマ

☆「神の義が啓示された」 16、17節

：16「私は福音を恥とは思いません。福音は、信じるすべての人の救いのための神の力だからです。最初ユダヤ人に、次に異邦人に」（NIV、下線付加）：

＊この書簡のテーマの一つ

「力」：

＊‘δύναμις（ディナミス）’、あるいは、霊的能力

＊パウロ、福音をすべての信じる人の生命を救いに導く「神の永久の力」とみなした

＊福音は、ただ失われた人が救われるために顕された

＊人の行く末は二者択一、「救い」か「滅び」

：17「なぜなら、福音のうちに神からの義が啓示されており、まさに、『義人は信仰によって生きる』と書いてあるように、その義は最初から最後まで信仰によるので」（NIV）：

＊「神の義」の意味を説明

＊「福音を信じる人の信仰に基づき、その信仰に応じて、神が人に与える義」の意

＊神が人を義と宣言されるのは、

神ご自身の言葉を正しいと信頼することから生み出される信仰による